

## 第2節 幼児期の美術鑑賞に関わる先行研究

### I. 幼児期の美術鑑賞研究概観

幼児期の美術鑑賞に関連する主要な研究を、表1に示す。倉橋惣三(1922, 1924, 1924)は、幼児期に優れた芸術作品に触れることの重要性を、1920年代初頭に指摘している。ほぼ同時期に、岸田劉生(1925)は、娘・麗子に向けた図画教育を「図畫教育論」としてまとめ、優れた作品に触れることが表現を高めることに繋がると述べている。しかし、その後、幼児期の美術鑑賞についての記述は、約50年後の川村善之(1975)の著作まで見ることができない。川村以降も、1990年代前半の寺川志奈子(1992, 1993, 1994, 1995)による一連の研究まで、約20年の経過がある。しかし、寺川の研究は、幼児の認知発達を主眼に置いたもので、美術鑑賞そのものについての研究ではない。美術鑑賞を主眼に置いた研究は、1990年代後半から散見するようになり、2000年以降増加している。『学習指導要領』において鑑賞と制作が並列して扱われるようになり、鑑賞教育に対する関心が高まったことから、小学校・中学校での鑑賞教育実践や研究が盛んになり、幼児を対象とした鑑賞教育へも関心が広がったものと考えられる。しかし、小学生以上を対象とした研究数には及ばず、幼児期の美術鑑賞に関する研究は、まだまだ十分と言える状況ではない。

欧米諸国では、日本より早く1980年代から、幼児期の鑑賞についての研究が見られるが、その数については類似する傾向にあり、散見するに留まる。また、いずれの研究にも「幼児に鑑賞はできるのだろうか」という問いが含まれており、このことは、欧米諸国においても、幼児期の鑑賞の重要性が十分に認識されていない現状を表している。

本節では、これらの研究の中から、特に本論文と関連深いと考えられるものを取り上げ、概観する。

表1. 幼児期の美術鑑賞に関連する主な研究

作者(年号)	文献
倉橋惣三 (1922)	「幼稚園に於ける藝術教育」, 『藝術教育の新研究』, 文化書房, 1922年. (「児童文化叢書」による復刻版, 大空社, 1987年)
倉橋惣三 (1924)	「創造性と鑑賞性(一)」, 『幼児の教育』24(5), 日本幼稚園協会, 1924年.
倉橋惣三 (1924)	「創造性と鑑賞性(續)」, 『幼児の教育』24(6), 日本幼稚園協会, 1924年.
岸田劉生 (1925)	「図畫教育論—我子への図畫教育」, 改造社, 1925年. (『岸田劉生全集』第3巻, 岩波書店, 1979年, 509-630頁)
川村善之 (1975)	「幼児の生活と鑑賞—幼児期に鑑賞はあるか」, 『美術の鑑賞教育—理論と実践』, 日本文教出版, 1975年, 54-55頁.
Taunton, M. (1982)	Aesthetic Responses of Young Children to the Visual Arts: A Review of the Literature, <i>Journal of aesthetic education</i> 16(3), 1982, 93-109.
Feeney, S. and Moravcik, E. (1987)	A Thing of Beauty — Aesthetic Development in Young Children, <i>Young Children</i> 42(6), 1987, 6-15.
McNamee, A. S. (1987)	Museum Readiness — Preparation for the Art Museum (Ages 3-8), <i>Childhood Education</i> 63(3), 1987, 181-187.
Cole, E. and Schaefer, C. (1990)	Can Young Children Be Art Critics?, <i>Young Children</i> 45(2), 1990, 33-38.
Wolf, A. D. (1990)	Art Postcards — Another Aspect of Your Aesthetics Program?, <i>Young Children</i> 45(2), 1990, 39-43.
寺川志奈子 (1992)	「幼児の描画における隠喩的表現の理解についてⅡ—理由づけについてのプロトコル分析」, 『日本教育心理学会総会発表論文集』第34号, 1992年, 47頁.
Aylward, K., Hartley, S., Field, T., Greer, J., and Vega-Lahr, N. (1993)	An art appreciation curriculum for preschool children, <i>Early Child Development and Care</i> 96(1), 1993, 35-48.
寺川志奈子 (1993)	「色の象徴性に関する幼児の判断についてⅠ」, 『日本教育心理学会総会発表論文集』第35号, 1993年, 235頁.
寺川志奈子 (1994)	「幼児期における絵画鑑賞能力の発達」, 『日本教育心理学会総会発表論文集』第36号, 1994年, 158頁.
寺川志奈子 (1995)	「絵画に対する幼児の評価」, 『日本教育心理学会総会発表論文集』第37号, 1995年, 359頁.
小松省三 (1998)	「幼児のための美術鑑賞」, 『川村学園女子大学研究紀要』第9巻第2号, 1998年, 111-122頁.
有馬知江美 (1999)	「哲学教育に関する考察(3): 子どもの哲学的姿勢と芸術による教育」, 『作新学院大学女子短期大学部紀要22』, 1999年.
有馬知江美 (2000)	「哲学教育に関する考察(5): 大原美術館「模写」プログラムと目の陶冶の問題」, 『作新学院大学女子短期大学部紀要24』, 2000年.

- Epstein, A. S. (2001) Thinking about Art: Encouraging Art Appreciation in Early Childhood Settings, *Young Children* 56 (3), 2001, 38-43.
- 有馬知江美 (2003) 「人間形成としての幼児対象プログラム」, 大原美術館教育普及活動この10年の歩み編集委員会/編『かえるがいる—大原美術館教育普及活動この10年の歩み 1993-2002』, 財団法人大原美術館・株式会社人文経済研究所, 2003年, 242-256頁.
- 竹井史 (2003) 「幼児の想像力と鑑賞」, 山木朝彦・仲野泰生・菅章/編著『美術鑑賞宣言—学校+美術館』, 日本文教出版, 2003年, 294-295頁.
- 開仁志・長谷川総一郎 (2004) 「幼児における美術館見学—ワークシート作成の試み」, 『富山大学教育実践総合センター紀要』第5号, 2004年, 69-80頁.
- 有馬知江美 (2005) 「哲学教育に関する考察(9): 大原美術館幼児対象プログラムにおける「お話づくり」と鑑賞の深化の問題」, 『作新学院大学女子短期大学部紀要』28, 2005年.
- Savva, A. and Trimis, E. (2005) Responses of Young Children to Contemporary Art Exhibits — The Role of Artistic Experiences, *International Journal of Education and the Arts* 6(13), 2005.
- 有馬知江美・赤羽薫 (2006) 「幼児を対象とした美術鑑賞プログラムにおける模写の実践過程の分析と考察」(平成17年度作新学院大学女子短期大学部研究奨励助成金(共同研究)報告書), 2006年.
- 金山和彦 (2006) 「幼児教育のイメージ形成と知覚的鑑賞活動について」, 『美術教育』第289号, 日本美術教育学会, 2006年, 37頁.
- 半直哉 (2006) 「造形の鑑賞に関する幼稚園教諭の意識」, 『山陽学園短期大学紀要』第37巻, 2006年, 75-89頁.
- 稲垣立男 (2007) 「美術館における未就学児の鑑賞教育について」, 『稚内北星学園大学紀要』第7号, 2007年.
- 半直哉 (2007) 「美術館における教育現場との連携に関する意識」, 『山陽学園短期大学紀要』第38巻, 2007年, 59-67頁.
- 鳥越亜矢 (2007) 「鑑賞における幼児と保育者とのかかわり」, 『美術教育』第290号, 日本美術教育学会, 2007年.
- 丁子かおる・千本木直行・松久公嗣 (2008) 「幼児の発達に適した試行的鑑賞実践の研究—大学と幼稚園の連携による鑑賞プロジェクトについて」, 『大学美術教育学会誌』第41号, 大学美術教育学会, 2008年, 165-172頁.
- Eckhoff, A. (2008) The Importance of Art Viewing Experiences in Early Childhood Visual Arts — The Exploration of a Master Art Teacher's Strategies for Meaningful Early Arts Experiences, *Early Childhood Education Journal* 35(5), 2008, 463-472.
- Johnson, M. H. (2008) Developing Verbal and Visual Literacy through Experiences in the Visual Arts, *Young Children* 63(1), 2008, 74-79.
- 三樹正典 (2008) 「幼児の創造性を豊かにする鑑賞方法についての一考察—「創造的鑑賞」に依拠した美術作品鑑賞について」, 『広島女学院大学論集』第58号, 2008年, 51-67頁.
- 三樹正典 (2009) 「幼児期の美術館での鑑賞活動における心理的効果について—「3H美術教育」「創造的鑑賞」に依拠した美術作品鑑賞」, 『広島女学院大学論集』第59号, 2009年, 31-45頁.
- 三樹正典 (2010) 「子どもの創造性を豊かにする鑑賞方法についての一考察—「創造的鑑賞」から「続き絵」を描く活動を通して」, 『広島女学院大学論集』第60号, 2010年, 43-55頁.

---

 年代順

## Ⅱ. 倉橋惣三、川村善之による論述

### 1. 倉橋惣三による論述

日本の保育に多大な影響を与えた倉橋惣三[1882-1955]は、「幼稚園に於ける藝術教育」(1922)及び「創造性と鑑賞性(一)」(1924)「創造性と鑑賞性(續)」(1924)において、鑑賞教育についての考えを記している<sup>1)2)3)</sup>。造形のみならず音楽や身体表現など保育内容として扱われる芸術分野全般を視野に入れているが、具体例には造形分野における制作と鑑賞を挙げている。

倉橋は、「鑑賞教育の方面についていへば、これ亦た幼児期の教育に於いて力を盡すべきは必要なことであり、また此の時に於てするを以て大に便利とすることである」と述べ、幼児期にこそ鑑賞教育を行うべきとしている。環境構成を重視し、「外国のよき幼稚園や小校学(ママ)に於いて其の國の藝術史上に於る第一等の名画—勿論模写であるが、教室や廊下にかけてある」と欧米視察の成果を示しつつ、「所が國の小学校や幼稚園では、掛図が或は児童の知識の為に、或は児童の道德感の為にのみ選ばれて、純粹藝術価値の上から見て甚だ低級なものゝみ多い実情」と当時の幼稚園等の鑑賞環境の問題を指摘し、「せめては装飾に於いて第一義的藝術品を与へたいと思ふ」と、優れた美術作品による環境構成を提案している。しかし、倉橋が最も重視しているのは、人的環境と言えよう。「欧米の大美術館を見る時に、母が四五歳の児をつれて大名画の前に立てる後姿を屢々見る。その母は敢てその絵に説明を試みる程でもなく、また説明もしないのであるが、凝ッと其の画面に見惚れてある母の顔と、その天下の名画とを見較べてある幼児の心には、母の鑑賞力によって助けられてある幸福な鑑賞力の働きが認められるのである」と、倉橋自身が欧米視察で見かけたであろう光景を理想の姿の例として挙げている。ここで重要なのは、保育者自身が作品を味わった上で、幼児に共感すること、共同注視することと言えよう。

このように、鑑賞の重要性を理解し幼児と共感できる鑑賞力を備えた保育者の養成を今後の課題として挙げているが、倉橋の問題提起から 90 年以上が経過しようとしている現在においても、その状況は改善されていないと言えよう。

1)倉橋惣三：「幼稚園に於ける藝術教育」、『藝術教育の新研究』、文化書房、1922年(「児童文化叢書」による復刻版、大空社、1987年)。

2)倉橋惣三：「創造性と鑑賞性(一)」、『幼児の教育』24(5)、日本幼稚園協会、1924年。

3)倉橋惣三：「創造性と鑑賞性(續)」、『幼児の教育』24(6)、日本幼稚園協会、1924年。

## 2. 川村善之による論述

川村善之(1975)は、「幼児の鑑賞が大人の鑑賞と同じものであるはずはなく、その意味では「鑑賞」とは呼べないものであろう。しかしいずれは(中略)鑑賞活動を行うことにつながっていく前段階なのであるから、やはり放任しておいてよいはずがない」と、幼児期の鑑賞の萌芽を見過ごしてはならないと指摘する。そして、幼児がものを「見る活動」は、「純粋な美的鑑賞とはいえないかもしれないが、それは当然のことであって、幼児の生活そのものが決してそのような美的とか、知的とかに分化できないものだからである」「幼児の鑑賞活動は、それだけが独立して存在するものではなく、知的・情緒的全生活と融合している」と、幼児の発達を踏まえた鑑賞の特徴を述べている<sup>4)</sup>。

本著作は、小学校・中学校における図画工作・美術科でも鑑賞の重要性が認識されていなかった時代に、鑑賞を取り上げた先見性のみならず、様々な角度から鑑賞を捉えている点でも意義深い。その中に、幼児期への目配りがされていることも驚きに値する。しかし、川村が、幼児の鑑賞において有益な環境となるものとして挙げているのは、絵本やテレビであって、美術作品ではない。幼児と美術作品という結びつきが、一般的ではない状況が窺える。

## Ⅲ. 保育における美術館利用についての見解

幼児の鑑賞のために美術館利用を取り入れることに言及した研究において、保育施設での活動と美術館での活動は相互に補完し合うもの、という考えは共通している。しかし、保育施設での鑑賞に関連する活動と美術館での鑑賞の関わりを、どう捉えるかということについて、概説すると2つの立場が見られた。1つは、美術館訪問を前提として保育施設で予備的に鑑賞に関連する活動を行うという立場であり、1つは、保育施設での鑑賞に関連する活動を中心に据えながら、美術館を利用するという立場である。

マクナミー(A. S. McNamee, 1987)は、「ミュージアム・レディネス(Museum Readiness)」として、3歳から8歳の子どもの発達過程から予測できる、美術館訪問の際の子どもの反

---

4)川村善之：「幼児の生活と鑑賞—幼児期に鑑賞はあるか」、『美術の鑑賞教育—理論と実践』、日本文教出版、1975年、54頁。

応を挙げ、改善策として、美術館を訪問する前から長期的に準備をすべきと述べている<sup>5)</sup>。子どもの発達過程は、知的発達、身体的発達、感情的・社会的発達の観点から、それぞれ挙げられている。例えば、知的発達の観点からは、子どもは、時間や空間などの理解が十分でないため、美術史や作品の技法や流派、また画家の生涯などを理解することができない、などが挙げられている。身体的発達の観点からは、美術館の広い空間で走ったりすることが、また、感情的・社会的発達の観点からは、公共の場で大声を出したりという衝動を抑制することが難しい、などが挙げられている。こうした状況に対し、マクナミーは、美術館を訪問する準備(ミュージアム・レディネス)を、子どもの発達過程に応じて、長期的に連続して行うべきであると述べている。具体的な準備内容としては、美的環境の創出と、造形諸要素への感受性の発達を促進する活動の設定を挙げている。美的環境の創出としては、日常保育との関連を配慮しながら保育室にポスターや複製画を掲示することや、生花や家具の配置に配慮することなどを述べている。また、色彩や形、質感など造形諸要素への感受性の発達を促進する活動としては、例えば色彩では、緑など特定の色を、保育室の中から見つけ出したり、それらの差異に気付かせたりする活動を推奨している。

マクナミーの言説は、小松省三(1998)の言説と類似する。小松は、審美的感情の発達を促進するものとして、保育の中での鑑賞活動について述べている<sup>6)</sup>。3歳から4歳の幼児には、自然の美しい光景などを保育者が幼児と共感的に見たり<sup>7)</sup>、家庭や保育室などに花や絵画を飾ることを勧めている。また、5歳から6歳の幼児向けの活動として、画集や美術絵本の読み聞かせ、絵葉書を使ったゲームなどを提案し、美術館訪問や作品の模写も活動例として挙げている<sup>8)</sup>。

総合すると、小松は、3歳から4歳では、美的環境に触れることや多様な素材体験を通して審美的感情を養い、5歳から6歳では、美術館での鑑賞を含むより具体的な鑑賞に移行することを述べており、前者は、マクナミーの述べる「ミュージアム・レディネス」の期間として、後者は、実際の美術館訪問ができる期間と考えることができる。しかし、両者の違いは、マクナミーは、美術館訪問を1つの目標として設定しているのに対し、小松

5) Abigail Stahl McNamee: Museum Readiness — Preparation for the Art Museum (Ages 3-8), *Childhood Education* 63(3), 1987, 181-187.

6) 小松省三:「幼児のための美術鑑賞」,『川村学園女子大学研究紀要』第9巻第2号,1998年,111-122頁。

7) 共感的な鑑賞は、倉橋惣三の論述とも類似する。

8) 模写は、原作品を模写させるのか、画集を見て模写させるのか、明確に記述されていないが、美術館訪問に関して他来館者への配慮を促す記述があることから、原作品の模写を推奨しているとは考え難い。

は、審美的感情を養うという目的の1つに、美術館訪問を含めていることである。マクナミーは、美術館訪問を前提として保育施設で予備的な活動をするという立場であり、小松は、保育施設での活動を中心に据えながら美術館を利用するという立場である。

エプステン(A. S. Epstein, 2001)もまた、保育施設での活動を中心に据えながら美術館を利用するという立場である。エプステンは、美術教育の目的は「価値を創造し、我々自身と我々と周囲との関わりの意味を見出すための力を拡大すること」<sup>9)</sup>という、スミスら(N. R. Smith & others, 1993)の言葉を引きながら、「感覚や感受性が開かれており、周囲の環境に調整しようとしている幼児こそ、美術鑑賞を教えるのにふさわしい」<sup>10)</sup>と述べている。その上で、「美術において考えること(thinking in art)」と「美術について考えること(thinking about art)」は異なるとし、前者は、伝統的な造形活動中心の美術教育であり、後者は、美術鑑賞であり、「作家や作品、そして我々の人生におけるそれらの意味を考えること」と定義している。そして、「美術について考える」ための幼児の鑑賞を保障する保育環境について、幼児の観察や意見を受容する支持的な環境や、複製画などを保育室に掲示することなどを提案している。そうした提案の中に、美術館への引率を挙げ、その事後活動として、教室での「美術館ごっこ」のような展示活動を行うことを挙げている。

これらの研究において、幼児の発達のために美術館で鑑賞することが、視野に含まれていることは意義深い。しかし、いずれの研究においても、美術館でどのような援助のもと鑑賞することが望ましいかという点については議論されていない。本論文では、日常の保育と美術館での活動が連動し補完し合うものであることを重視しながら、美術館で幼児が鑑賞する際の望ましい援助について、具体的に研究する。

#### IV. 美術館での鑑賞実践を取り入れた研究

サヴァとトリミス(A. Savva & E. Trimis, 2005)は、幼児に美術館で現代美術作品を見せる実践を行い、幼児が現代美術作品に対しどのように反応するか、また、美術館での鑑賞

---

9) N. R. Smith with C. Fucigna, M. Kennedy and L. Lord: Experience and art, *Teaching children to paint. 2nd ed.*, Teachers College Press, 1993.

10) Ann S. Epstein: Thinking about Art: Encouraging Art Appreciation in Early Childhood Settings, *Young Children* 56(3), 2001, 38-43.

経験が、その後の造形活動などにどのように影響するかについて研究している<sup>11)</sup>。その結果として、幼児は、立体造形作品により強い関心を示すこと、また、表現の中に、幼児の好きなものや日頃親しんでいるものが含まれている作品を好むことを述べている。これらは、本論文の第2章で述べる結果と類似しており、日本の幼児とギリシアの幼児の関心に共通性があることを示している。

三柵正典(2008, 2009, 2010)は、一連の論文において、美術館で幼児に作品を見せ、その後制作を行う活動を報告している<sup>12)</sup>。三柵は、保育内容の領域「表現」と小学校の図画工作科との接続や、『小学校学習指導要領』における鑑賞の取り扱いが、子どもの鑑賞対象を妨げることなどを憂慮し、幼児期の鑑賞の重要性を述べている。そうした現状への対応として、美術館へ幼稚園児を連れて行き、基本的には、鑑賞、制作、制作中のフィードバックによる鑑賞、という流れの中での活動を提案し、実践している。三柵の実践は、「幼児の創造性を豊かにする鑑賞方法」という表題にも見られるように、鑑賞を契機とする制作の広がり重視しており、実践後の幼稚園での表現活動への広がりを含めて報告している。本論文では、「模写」や「模刻」など制作を通じた鑑賞を取り上げる。それらの活動による幼児の造形表現の発達も期待するが、鑑賞の側面を中心に考察する。

## V. 本論文と近接する研究と本論文の独自性

有馬知江美(1999, 2000, 2005, 2006)は、幼児の哲学教育の観点から、大原美術館の幼児対象プログラムを事例の中心に据え、研究している<sup>13)</sup>。有馬による一連の研究には、「近

---

11) Andri Savva and Eli Trimis: Responses of Young Children to Contemporary Art Exhibits: The Role of Artistic Experiences, *International Journal of Education and the Arts* 6(13), 2005.

12) 三柵正典：「幼児の創造性を豊かにする鑑賞方法についての一考察—「創造的鑑賞」に依拠した美術作品鑑賞について」、『広島女学院大学論集』第58号，51-67頁。三柵正典：「幼児期の美術館での鑑賞活動における心理的效果について—「3H 美術教育」「創造的鑑賞」に依拠した美術作品鑑賞」、『広島女学院大学論集』第59号，31-45頁。三柵正典：「子どもの創造性を豊かにする鑑賞方法についての一考察—「創造的鑑賞」から「続き絵」を描く活動を通して」、『広島女学院大学論集』第60号，43-55頁。

13) 有馬知江美：「哲学教育に関する考察(3)：子どもの哲学的姿勢と芸術による教育」、『作新学院大学女子短期大学部紀要 22』，1999年。有馬知江美：「哲学教育に関する考察(5)：大原美術館「模写」プログラムと目の陶冶の問題」、『作新学院大学女子短期大学部紀要 24』，2000年。有馬知江美：「哲学教育に関する考察(9)：大原美術館幼児対象プログラムにおける「お話づくり」と鑑賞の深化の問題」、『作新学院大学女子短期大学部紀要 28』，2005年。有馬知江美・赤羽薫：「幼児を対象とした美術鑑賞プログラムにおける模写の実践過程の分析と考察」(平成17年度作新学院大学女子短期大学部研究奨励助成金(共同研究)報告書)，2006年。



代合理主義批判、教養主義批判という観点から、私たちが非合理主義に立ち、自分たちを取り巻く世界に充溢する生を直観するということの意義を考察し、さらにそれをいかなる人間形成のあり方としてなすべきかを探求するという」テーマが低通している<sup>14)</sup>。研究課題に取り組むに当たり、「直観力の発揮に最も優れ、自らの言葉を用いて世界に関わろうとする幼児期の子どもに焦点を当てることが不可避的である」とし、さらに「幼児による認識対象を生を充溢する美術作品とし、それを美術館という場における美術作品の鑑賞として捉えることがこの研究の突破口となることを認識した」と述べている<sup>15)</sup>。その観点から、有馬は、本論文とも共通する問題について考察している。即ち、「なぜ幼児であるか」「なぜ美術作品であるか」「なぜ美術館であるか」という問題である。これらの問いに対し、有馬は「子どもたちが就学し学校化されることによって、彼らの世界に対する認識方法を変容させ」、学校化により「幼児がもつ直観力は脆弱なものになる」と考える。そのため、就学前に美術作品と対峙し、「自分の言葉で語り、考える」ことが大切だと述べる<sup>16)</sup>。

有馬に対し、筆者は大原美術館の幼児対象プログラムを運営実施する立場から、情報やデータ、見学機会の提供を行い、多くの議論を持ってきた。そのため、有馬と筆者の研究は影響関係にある。相違点を述べるならば、有馬は、先に述べた通り幼児の哲学教育の観点から研究を進めているのに対し、筆者は、幼児教育を基盤に、学校教育と美術館教育(社会教育)の連携協働の立場から鑑賞教育そのものを扱い、生涯にわたる美術館の利用を視野に入れている点である。具体的には、有馬は、鑑賞が個人的な活動であることを重視し、幼児対象プログラムの中でも、より個人的に作品と対峙することを要請する絵画鑑賞プログラム「模写」を重要視する。筆者は、有馬の見解に賛同するが、本論文においては、幼児の共同的な作品への探求である絵画鑑賞プログラム「対話」や「お話作り」などにも価値を見出す。生涯学習社会における学校教育の役割として、子どもと社会教育機関との関わりの端緒を持たせるという点から、保育施設と美術館との連携において鑑賞活動を実施していくことを重視する立場からである。

---

14) 有馬・赤羽, 前掲著 12), 4 頁.

15) 有馬・赤羽, 前掲著 12), 5 頁.

16) 有馬・赤羽, 前掲著 12), 9 頁.